Osaka University Knowledge Archive

Title	なぜ学内の国際交流機会に参加しないのか ： 理系学生を対象にしたPAC分析から
Author(s)	中橋, 真穂
Citation	大阪大学高等教育研究. 2024, 12, p. 59-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94845
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学高等教育研究　12（2024），59 − 66

【調査報告】

なぜ学内の国際交流機会に参加しないのか

― 理系学生を対象にしたPAC分析から ―

中橋　真穂[※1]

Why do some students not participate in international exchange opportunities on campus? -From PAC analysis targeting engineering students-

NAKAHASHI Maho[※1]

昨今，グローバル社会の進展により，各大学でもグローバル人材の育成を目標に掲げ，留学や学内外の国際交流プログラムなどが盛んに実施されてきた．一方で，日本人の「内向き志向」が指摘され，中でも理系学生はその傾向が強いといわれている．そこで本稿は，なぜ一番気軽に参加できるはずの学内の国際交流機会に参加しないのか，その理由と英語やグローバル人材に対する意識に関して，海外留学や国際交流への参加をためらう２名の理系学生を対象にPAC分析及び半構造化インタビューを実施した．結果，英語の必要性を感じながらも，英語力への自信の無さ，他の日本人参加者の前で失敗することへの恐れから，国際交流機会への参加を敬遠していることが明らかとなった．また，一見「内向き」とも捉えられる発言もあったが，英語は必要であると認識し，ローカルへの還元を目的としたグローバル人材の必要性については肯定的な姿勢を示した．

キーワード：グローバル化，海外留学，国際交流，内向き志向，PAC分析

With the development of a global society in recent years, universities have set the goal of developing global human resources and have actively implemented study abroad programs and international exchange programs both inside and outside the universities. On the other hand, it has been pointed out that Japanese people are “Inward-looking,” and science students are said to be particularly prone to this tendency. Therefore, this paper has conducted PAC analysis and semi-structured interviews of two science students who are hesitant to study abroad or participate in international exchange to discover reasons for their reluctance and their degree of awareness of English and global human resources. The results revealed that although they feel the need to learn English, they shy away from participating in international exchange opportunities due to a lack of confidence in their English ability and fear of failing in front of other Japanese participants. Additionally, although students made comments that initially appeared to be interpreted as “Inward-looking,” they recognized that English is necessary and expressed a positive attitude toward becoming individuals with global human resources who aim to give back to the local community.

Keywords：Globalization, Study-abroad program, International exchange, Inward-looking, PAC analysis

所　属：[※1]大阪大学大学院工学研究科国際交流推進センター
Affiliation：[※1]Center for International Affairs, Graduate School of Engineering, Osaka University
連絡先：nakahashi-m@fsao.eng.osaka-u.ac.jp（中橋　真穂）

1　はじめに

昨今，グローバル社会の進展により，各大学でもグローバル人材の育成を目標に掲げ，留学や学内外の国際交流プログラムなどが盛んに実施されてきた．一方で，日本人の「内向き志向」が指摘され，中でも理系学生はその傾向が強いといわれている．リクルート（2016）の調査によると，「留学意向あり」の割合は文系女子では37.3％なのに対して理系男子では28.8％に留まっており，英語の苦手意識が比較的高い傾向にあるという．また，理系学生は専門分野以外に無関心で付き合い下手（毎日新聞科学環境部 2007）との指摘もある．研究室に所属し，研究を進める場合，例えば短期であっても留学等で研究室を不在にするのは難しいといった理由から留学などを諦める学生や，英語への苦手意識から海外へ行くことを敬遠する学生がいるのも事実である（中橋 2015）．しかし，日々新しい成果が生まれる先端科学技術の担い手である理系学生にとって，グローバルに活躍する能力は必要不可欠であり，これらの人材の育成は急務の課題である．

日本の大学におけるグローバル人材の育成に向けた様々な取り組みの代表例として，海外留学が挙げられる．短期語学研修，長期留学，研究留学，海外インターンシップなど期間や内容に関わらず，海外での経験はグローバル人材育成において重要であると指摘されている（例えば，渡部 2009，宮本 2012等）．一方，経済的理由や授業，企業インターンシップ，就職活動など時間的制約や語学力不足などの理由で実際に海外留学を実現する学生はごく少数派であるというのが現状である（岩城 2012）．そこで，海外留学などの促進と並行し，より気軽に参加・利用することの出来る学内の国際交流機会の整備はグローバル人材育成において重要なポイントであろう．A大学工学部工学研究科では，より気軽に国際交流や英語力向上の機会を提供すべく，学内で英語や異文化に触れたい本学の学生と外国人留学生が交流する機会を月に数回，設けている．英語でゲームをしたり，異なるバックグラウンドを持つ者同士が雑談をしたりすることを通し英語力を高め，異文化への理解を深める機会とし，グローバル人材育成の第一段階として位置付けている．ただ，本イベントに参加する学生はほんの一握りであり，国際交流に積極的な学生は，本イベント等に参加することでより英語力を高め，自信を付け，さらには留学へとモチベーションを高める一方，あまり交際交流に興味を示さない学生との差は開く一方である．

2　研究の目的

そこで本調査は，学内の国際交流機会への参加をためらう学生へのインタビューを通し，なぜ国際交流に参加しないのか，その理由と英語やグローバル人材に対する意識を明らかにすることを通して，今後の国際交流プログラムや海外留学促進の在り方について考察することを目的とする．とりわけ本調査では，先述したように比較的「内向き志向」が指摘される、理系学生を対象にした．なお，当国際交流は，大学の国際化及びグローバル人材育成を目標に，工学部工学研究科の外国人留学生と，同じく工学部工学研究科の英語や異文化に触れたい本学の学生が英語で楽しみながら交流する場として，月に数回，1回につき1時間のセッションを行っている．特に普段英語を話す機会のあまりない学生が学内で英語や異文化に触れることのできる身近な「きっかけ」といった位置づけでもある．学生運営スタッフ（本学の学生約3名）が主体的に交流を深めるゲームなどを企画し実施することで，英語や異文化に興味のある本学の学生と外国人留学生との間に会話の生まれる仕掛け作りをしてきた．

3　先行研究

「内向き」に関する調査研究は，海外留学とその効果に関する研究などと比較すると非常に少ない．その中でも例えば太田（2011）は，少子高齢化や国際競争の激化のなかで多くの企業は海外市場への進出を加速化しており，そこで活躍するグローバル人材の育成，確保を進めているのに対し，その担い手となるべき若者は「内向き志向」を強めており，求める人材と働きたい若者とのミスマッチが起きていると指摘する．太田（2014）は，日本から海外への留学者数の減少や，アジア主要国からアメリカ合衆国への留学生数の推移をふまえて国際志向性について論じ，若者の「内向き化」を指摘した．ただし，海外志向が強い層である「外向き」と，弱い層である「内向き」で二極化しているという特徴もあるとした．また，留学先の学費の上昇傾向から，心理的な変化（内向き化）だけでなく，社会的，経済的，政治的な状況の変化の検証も必要であることを指摘している．そのうえで，若者の意識が本質的に内向き化しているというよりは，今の日本社会が，彼らの目線を内側に向かわせていると解釈すべきだろうと結論づけた．

この指摘をグローバリゼーションの観点から検討した

藤田（2015）は，グローバリゼーションの進行と留学希望の低下との相関を明らかにし，日本国内と国外の価値の平準化が起きていることを示唆した．また，小島他（2014）は，留学を阻害する要因として，留学費用や留学時期以外に，若者の「内向き志向」が問題視されているとし，「内向き志向」と留学の関係に注目した．「内向き志向」を「内向性」と捉え，留学に関して内向群と外向群の差について検討した．結果，外向群に比べ内向群に留学意思はなく，海外での生活や対人関係，語学力不足，留学先の教育レベルの高さなどをより問題視しており，「内向き」な学生の不安を軽減するような留学に関する情報提供により，海外留学は促進されると結論づけた．

小林（2017）は，「内向き」イメージが社会的に構成されたものであるとの前提に立ち，新聞や雑誌記事の言説を分析した．結果，「内向き」イメージは，2009年の政府資料をきっかけとして社会的に構成され，社会に定着したことが明らかになった．また，「内向き」言説の根拠として言及される日本人の海外留学に関する各種統計について，多様な留学の定義を整理しながら検討した結果，エリート層が中心となる長期留学が減少する一方，非エリート層中心の短期留学が増加していると考えられる点が示唆された．そして，長期留学の減少について若者の「内向き」志向と一般化してしまうことの誤謬と，教育格差の視座から短期留学に着目する必要性について指摘している．

伊藤（2023）は，異文化間感受性尺度（Intercultural Sensitivity Scale）および関係流動性尺度（Relational Mobility）を用いた，大学生の異文化受容の程度，人間関係の自由度について調査することで，文化的側面と人間関係を把握し，内向き志向の実態について分析を行った．コロナ禍という社会的な変化をふまえつつ，異文化受容や人間関係の流動性を測ることで，ローカルなスケールにおける内向き志向のあり方を検討する基礎的なデータを検討し，解釈の可能性を考察した．結果，コロナ禍という大きな制約の中でも，接触方法を変化させて交流を継続している様子がデータからみられ，異文化受容や人間関係の流動性の観点からは，内向き志向が限定的な層であることを明らかにした．ただ，具体的な接触場面に対して不慣れな感情や不安がある傾向や，オンライン環境で関係の流動性の低い層があることから，対面接触の交流がある程度必要であることを示唆したとした．

以上のように，「内向き」に関する研究が実施されてきたが，一方，理系学生に焦点を当てたものは概観の限りなく，また，アンケート調査等の量的調査が多く，それに比較して当事者視点で実証的に明らかにする質的研究の蓄積は少ないのが現状である．国際交流や留学への参加をどうとらえるか，またそれらの要因は何か等は当事者の視点でこそ明らかになるといえ，主役である学生の視点を取り入れた研究の発展が今後益々必要であると考える．

4　調査の概要

本研究で用いる研究方法は，内藤（1993）により開発されたPersonal Attitude Construct分析実施法（以下，PAC）である．当該手法を用いた研究は多岐に渡っているが，この手法の利点は，1．質的研究と量的研究の長所を掛け合わせたものであり，2．調査者は調査協力者の枠組みを用いて調査協力者の体験を理解しようとでき，3．調査協力者の報告及びその解釈はデンドログラムに基づいているので再現性が高いという3つが挙げられる（末田 2001）．海外研修参加者を対象にこの分析方法を用いて実施された調査は，渡部（2009），中川（2013），中橋（2015）などがある．渡部は，研修参加前後に留学・海外研修についてのイメージを連想させ，その背景にある体験や意識などを明らかにした．これらを参考にしながら，本稿は特に，先に述べたように学内の国際交流機会に参加する意欲の低い理系学生に焦点を当てる．

なお，調査協力者の負担を軽減するため，土田（2003）が開発したPAC分析支援ツール（PAC-assist）を使用し，PAC分析を実施した．PAC分析の流れは以下の通りである．

1）調査者が，調査協力者に，連想刺激文（本研究では「あなたにとって国際交流や留学に対するイメージはどのようなものですか．思い浮かんだ言葉やイメージを，思いつくだけ挙げてください．単語でも，短い文でもかまいません．」）を提示する．

2）調査協力者が，刺激文からイメージする言葉や文をPAC-assistに入力する（数に制限はない）．

3）入力した言葉（文）を重要度順に数字を付ける．

4）PAC-assistの比較開始ボタンを押すと，入力した言葉（文）が2ずつランダムに表示される．調査協力者

に，それらのイメージの近さを（1）非常に近い～（7）非常に遠い，の7段階で評価してもらう．

5）4）で得られた類似度距離行列に基づき，ウォード法によるクラスター分析（SPSS Version.22）を行い，デンドログラムを出力する．

6）デンドログラムをもとに各項目やクラスターについてインタビューを実施する（ICレコーダで録音）．

7）6）までのデータをもとに，調査者により全体的な分析と考察をする．

調査協力者はA大学の理系大学院生（前期課程1年生）2名である（表1）．国際交流活動を積極的に行う学生に依頼をし，学内の国際交流に参加したことのない学生を紹介してもらった．2人のうち1人は短期の語学研修に参加した経験を持つが，2人とも学内の国際交流イベントなどへ参加したことはなく，今後も参加する予定はないと述べた．1人は短期であれ語学研修への参加経験を持つことから，当初予定していた，先行研究などで取り上げた，いわゆる典型的な「内向き」学生の代表とは一概にはいえない．あくまでも，それぞれの理由で学内の国際交流へ参加したことがない学生を対象に，参加しない理由を中心にインタビューを実施した．

調査協力者に対し，先述したPAC分析を2016年に実施し，そこから算出したデンドログラムをもとに，約1時間の半構造化インタビューを実施した．インタビューは学内の交流スペースなど，調査協力者がリラックスできる環境で行い，本人の許可を取り，ICレコーダーで録音した．インタビューの際には，協力者の考えなど個人の視点を重視し語ってもらうようにした．

表1　調査協力者

名前	性別	所属	学年	留学	国際交流イベント
Aさん	女性	理系研究科	修士1年	経験なし	参加経験なし
Bさん	女性	理系研究科	修士1年	経験あり	参加経験なし

5　調査結果

クラスター分析の結果出されたデンドログラムをもとにインタビューを実施した．紙幅の関係上，デンドログラムと一部インタビューを抜粋し，クラスター（CL）ごとの解釈を提示する．

5.1　AさんのPAC分析

はじめに，Aさんのデンドログラムと各解釈を以下に示す（図1）．デンドログラムの全体とそれぞれのクラスターを名付けてもらったところ，Aさんは，図1のように，上の5つの項目をまとめて「留学への動機」，下の5つの項目をまとめて「留学への障壁」と名付けた．「留学への動機」部分では，留学が自分の将来にどう影響するか，「留学への障壁」では，実際に行動に移せない要因についての項目が提示されている．以下，各クラスターの説明を本人の語りを引用して紹介する．

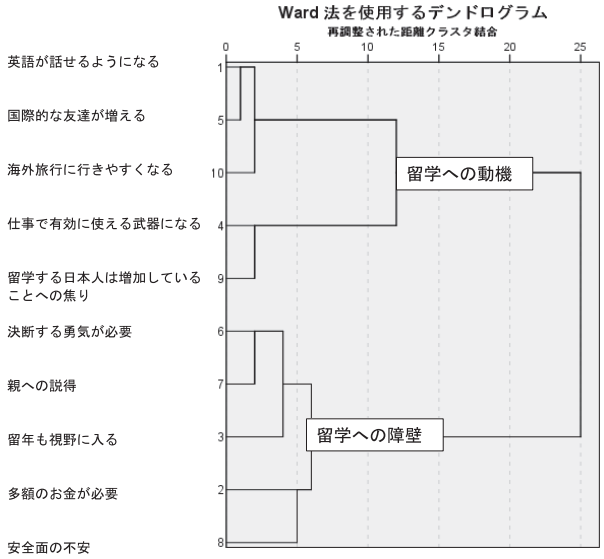

図1　Aさんのデンドログラム

CL1：留学への動機

留学の動機の一つに，留学する日本人が増加していることへの焦り．そうですね，もうどんどん留学とかも普通になっていって，英語喋る人が増えていっていて，でも自分は喋れなくて，まだ喋れなくても仕事はあるけれど，（中略）でも多分20年後とかしたら日本も日本語だけ喋れても仕事がないとか，やっぱり国際的になっていかないといけないんだろうなと思っていて．その波に乗れていない自分への焦り．

英語は話せるようになりたいですね．（中略）国際的な学生会議みたいなものに応募したんですけど，英語面接があって，そこで落ちてしまったっていうのもあって，やっぱり英語がないと，やりたいこともできないなというのが結構最近思っています．

CL2：留学への障壁

なんでできないかっていうのが結構この下の5つとかになってくるんですけど．まあもう海外だったら，全然何歳になっても大学行っても普通なのかもしれないけど，やっぱり日本の社会で生きるっていう意味では，大学院まで行っていて，さらに1年，まあ1年行かないにしても，留年するかもしれないとなると，25とかになって，で，結婚してからの復帰って，やっぱりまだまだ女の人ってまだ日本じゃ，ダメじゃないですか．となると，働く期間が単純に短くなるっていうのがちょっと．（中略）やっぱり1年早く社会にでればそれだけお金ももらえるし，そうですね，なんかここは結構ネックですね．

以上のように，留学が将来に有効であろうことを意識し，グローバル人材の必要性が叫ばれ，留学にいく日本人が増加していると捉える中で，その波に乗れていないことに焦りを感じている．また，英語の必要性を自覚しつつも，英語が喋れないことへの不安を語った．

一方，留学を妨げる大きな要因の一つとして，留年などで卒業が遅れることを挙げている．日本社会の在り方と女性の社会復帰についても言及し，留学によるデメリットについて語っている．

また，本デンドログラムに関する内容に追加して，その他の質問にも答えてもらった．以下，一部抜粋する．

筆者：何が変われば，国際交流とかに参加しようと思う？

Aさん：行っても喋れない．・・うーん，やっぱり英語喋れて当然というか，その中でいきなり英語で喋るのはちょっとまだ，ちょっとまだハードルが高すぎるというか．みんな（英語を）喋れているイメージ．なんか，英語に自信がなくて不安なのに，自分から飛び込まなければいけないという……，環境のせいにしてしまってはいけないんですけど，それが自分は厳しいというか．自信があれば全然いくんですけど．（中略）英語が喋れないと，喋ってくれないんじゃないかというか．そもそもコミュニケーションが取れないわけですから．とかはちょっと．しんどいところですね．（中略）向こうから来てくれたら，違うかもしれないです．

国際交流に参加しない大きな要因の一つとして，英語を話すことへの自信の無さが挙げられた．国際交流の場に参加する人たちは，「皆英語が喋れているイメージ」を持ち，英語学習への高い動機を持ち，英語が得意であるとイメージし，そうでない自分が自発的にその場へ参加しなくてはいけない状況が，参加を躊躇する要因となっていることが分かる．

当国際交流機会は，英語に自信がない人の参加も歓迎しており，簡単な英語で交流が図れるゲームなどを提供するなど，英語のレベルに関わらずコミュニケーションを促す工夫をしている．しかし，Aさんが語ったように，外部から見ると参加者皆が英語でスムーズに会話し，交流しているようにイメージされ，参加したことのない学生にとっては，英語力が一定以上ないと参加しづらいと感じることは容易に想像できる．いかにこの障壁を取り払うかが，新しい参加者を増やすカギとなる．「向こうからきてくれたら」と語っているのに加え，インタビュー内では，「国際交流機会が研究室に来たら，逃げられないので参加する」といった冗談も語られた．どのような形であれ一度参加することで，Aさんのように英語力に不安を持つ学生の抱く国際交流機会に参加している学生のイメージや環境を払拭できる可能性は高い．

次に，昨今必要性が叫ばれているグローバル人材について語られた部分を取り上げる．

筆者：グローバル人材って今すごい言われているけど，どう思いますか．自分もなりたいとか，どういうイメージとか．

Aさん：そうですね，多分世界に出たくてとか，という意味でのグローバル人材には魅力はないんですけど，やっぱり日本人だし日本で生まれたし，最終的にやっぱり日本のためになるんだったら，グローバルにいって，ということは全然，なんかめっちゃいいなとは思います．外から見ないと日本のことも分からなかったりするので．

「世界に出たい」という意味でのグローバル人材に魅力は感じないとしながらも，Aさんにとってのローカルである日本をよりよくするためにグローバル人材の必要性を感じ，肯定的に捉えていることが分かる．

「世界に出たい」という部分を否定している点で一見内向きとも捉えられる発言ではあるが，文部科学省(2011)は「グローバル人材」について，要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力，要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調，柔軟性，責任感・使命感，要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティといった3つの要素を示すとともに，幅広い教養と深い専門性，課題発見・解決能力，チームワークとリーダー

シップ等を要素として掲げている．Aさんは，少なくとも日本人としてのアイデンティティを肯定的に持ち，ローカルへの還元のためのグローバル人材には前向きであることが分かる．

次に，周囲の学生の意識についての語りを取り上げる．

筆者：周りに留学とか国際交流に全く興味のない学生って，いる？
Aさん：全くかは分からないですけど，あまり興味のない人はたくさんいます．英語が必要だと思っていないというか，自分の将来に．実際その分野では必要ないのかな．この分野ではまあ，読めたら別に喋る必要はないので．でも，日本もこれからどんどんどうなるか分からないし，海外の人たちも増えていって．だから今現状は，ないという感じです．英語はそりゃ喋れたほうがいいだろうっていうのは共通認識であるんですけど，別に大切だからといって，自分がやろうとはならないという感じかなと．

Aさんは，周囲の学生について，国際交流に興味のない学生が「たくさん」いるとした．その理由として，理系の研究環境において，英語の論文等を「読めたら別に喋る必要はない」「自分がやろうとはならない」からだとしている．研究，開発職において，論文を英語で読む能力は必要であるが，英語で話す能力は必要でないと認識している学生が多い点は，理系分野特有の現象であると考えられる．一方で，それは現時点でのことであり，今後は日本のグローバル化に伴い英語も必要になってくるであろうことも思案している．研究，開発職であっても，今後，同僚や共同研究先が日本語話者とは限らないことは，Aさんや周囲の学生も自覚していることが語りから分かる．

5.2　BさんのPAC分析

次に，Bさんのデンドログラムと各解釈を以下に示す（図2）．デンドログラムの全体とそれぞれのクラスターを名付けてもらったところ，Bさんは図2のように，上の6つの項目をまとめて「新しい発見」，下の4つの項目をまとめて「成長」と名付けた．Bさんは，学部在学中に1か月の英語圏への語学留学経験がある．この経験が，当デンドログラムを構成するもととなっていると予想する．留学に行く積極性はある一方，学内の国際交流イベントなどには参加したことがなく，今後も参加する気はないという．以下，本人の語りを引用して紹介する．

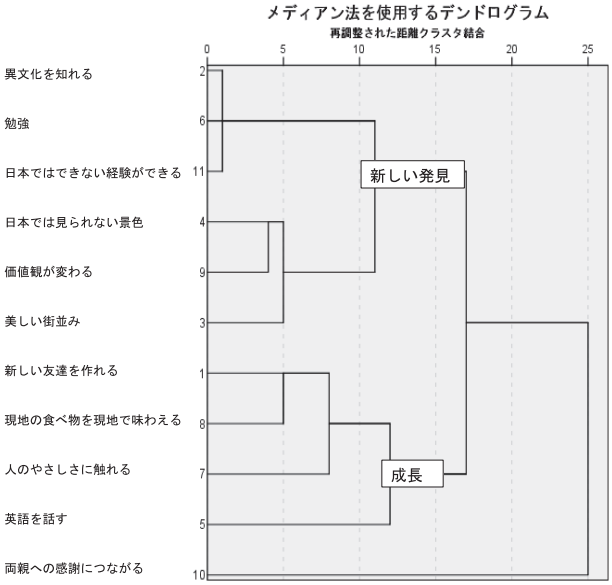

図2　Bさんのデンドログラム

CL1：新しい発見

私はそんなに英語をめちゃくちゃ勉強したいっていう意識はあまりないので，それよりも，異文化とか，違う人と触れ合ったり，違うものを見たりして，新しいことを考えたりとか，これ面白そうだなって思うのが好きなので，例えば，同じことをしても日本とやっぱり違う環境でやったら違う結果が出たりするので，そういう勉強になったりとか．日本では生活が当たり前じゃないといった発見が大きかったので．

CL2：成長

違う環境で，友達つくって，人の優しさに触れて，やっぱり留学とか，そういうところって，やっぱり知っている人が誰もいない，自分で全部やらなきゃいけない中で，両親とか周りの人いっぱい助けてくれたな，と．そういった気づきも含めて，成長できたな，と感じるので．

以上のように，デンドログラムは留学の体験に関わる項目が大半を占めた．留学を通して，発見と成長の機会を得ていることから一見，国際交流に積極的と捉えられる一方，学内の国際交流には参加したことがなく，今後も参加する予定はないのはなぜだろうか．その点も含め，本デンドログラムに関する内容に追加して，その他の質問への回答部分を以下，一部抜粋する．

筆者：学内の国際交流機会にはなぜ参加しない？

Bさん：なんか日本でやるっていうのが，やろうっていう，足を別に運びたくないというか．確かに（国際交流イベントに）行っている子はすごい英語を勉強したいっていう子がいて，私はそうでもないし，完璧にペラペラというか，ネイティブの人たちみたいに英語を喋りたいという気持ちがあまりなくて．自分の英語もそんなに自信がない．でも海外だったら自信を持って喋れるんですよ．だけど日本だったら，あまり喋りたくないというか．海外だと，例えば向こうは日本人が英語が下手という感じで接してくれるし，ちょっと位失敗しても別に普通だし，すごい聴こうとしてくれると思うんですけど，日本だと皆すごい勉強しているからミスるのが怖い．特に日本人の友達の前で，英語で話すっていうのは，恥ずかしいし怖い．っていうので，あまり英語を日本で喋るっていうのはちょっと怖いっていうか．そういう気持ちはありますね．

1か月と短期ではあるが語学留学経験もあるBさんだが，日本での国際交流機会への参加には興味がない点について，「日本だと（中略）ミスるのが怖い．」と語った．外国であれば，英語が下手な日本人であるという前提のもと失敗を恐れず話すことが出来るのに対し，日本国内，とりわけ身近な友人の前で英語を話すのを「恥ずかしいし怖い」と感じている．高いモチベーションを持って英語を話すために参加している日本人の中では失敗できないといった，Aさんとは異なる理由で，参加を躊躇していることが明らかになった．

筆者：英語は将来に必要だと思う？
Bさん：必要なこともあると思う．でもやっぱり今やることとか，優先順位をつけていったときに，どうしても英語が下の方になってしまうというか．結構やらなきゃいけないっていう段階でやる気が出るタイプなんで．でも何かと理由をつけて逃げているというのもあるかもしれないです．

優先順位としては下の方であり，「何かと理由をつけて逃げている」と語ったものの，Aさんと同じく，英語の必要性は感じていることが分かる．また，グローバル人材に関しても，以下のように語っている．

筆者：今よく言われているグローバル人材についてどう思う？
Bさん：日本の地域とか町とか，文化とか習慣とか，街について知るのがすごい好きなので．そういう助けになるような仕事がしたいな，と思って．（中略）なんか，すごい皆，グローバル志向なんですけど，私はすごいローカル志向というか．

グローバル人材が叫ばれている昨今，社会は「すごい皆，グローバル志向」と感じる一方，自分を「ローカル志向」と捉えている．しかしそれは，興味の方向が「日本の地域とか町とか，文化とか習慣」といったローカルなものであることが理由であり，必ずしもそれが，グローバル人材と相反するものとは捉えられないといえよう．Aさんとも共通しているが，ローカルに目を向けていることが，すなわちグローバルではないとはいえないと考察する．

6　まとめ

以上，2名の理系大学院生を対象に，国際交流及び海外留学に対する意識について，PAC分析を実施した．結果，それぞれの理由で，海外留学や国際交流機会に参加しないことが明らかとなった．

Aさんに関しては，自分自身の英語力への自信の無さが，海外留学や国際交流機会への参加を妨げていた．特に，学内の国際交流機会については，そこに参加している人の英語力やモチベーションの高さを想像し，敬遠していることが分かる．先にも述べたように，海外留学などの促進と並行しより気軽に参加することの出来る学内の国際交流機会の整備がグローバル人材育成への第一ステップと捉えるのであれば，もっと気軽に，英語力の有無に関わらず参加を促す仕組みづくりが必要であろう．特に，参加者はモチベーションや英語力が高いといったイメージを払拭するための，きっかけ作りや見える化を意識して国際交流機会を提供していくことが必要である．

Bさんに関しては，Aさんとは多少異なる理由から参加を敬遠していた．短期の語学留学経験もあるBさんは，外国では英語を恐れずに話す．しかし，日本人の前では失敗を恐れている．当国際交流機会は，複数人で構成されたグループでゲームをしたり，談笑をしたりする機会が多い．Aさん，Bさんのように，他の参加者の英語力を意識するあまり，参加を敬遠してしまっている場合，複数人よりも一対一の交流の方がリラックスして参加することができる可能性もある．一対一で自分のペースで，他の日本人参加学生の目を気にせずに外国人留学

生と交流する機会は，より参加のハードルを下げることも期待できる．

また，一見「内向き」とも捉えられる発言はあったものの，英語の必要性やグローバル化の進展についてはAさんもBさんもそれぞれが意識しており，完全に拒否している訳でも必要性を感じていない訳でもない．

Aさんも周りの学生について言及していたように，その他の多くの学生も同様に，必要性は十分に感じていると予想できることから，少しでも多くの学生に届くよう，アプローチや実施形態を柔軟に変えながら，身近な国際交流機会の提供を続けることが重要であろう．

グローバル人材に関しては，Aさん，Bさんともに，何がなんでも海外へといった意識ではなく，あくまでも自分自身や日本の将来に必要であれば，といった姿勢であった．本人たちは自分自身を「ローカル志向」，「内向き」と捉えていたが，多義でのグローバル人材の可能性を十分に含んでいる．アンケート調査などの量的調査であれば，留学や国際交流に興味のない学生としてカテゴリー化される可能性もあるが，AさんやBさんへのインタビューから明らかになったように，海外留学や国際交流に参加せず，英語に自信のない学生たちを，ひとまとめに「内向き」と捉えることは早計に失するともいえよう．

以上，理系大学院生2名に対する調査から，なぜ海外留学や国際交流に参加しないのか，その理由と英語やグローバル人材に対する意識を明らかにすることを通して，今後の留学及び国際交流プログラムの促進の在り方について考察した．今後は更なる調査や分析の継続，それらを踏まえた実践への応用により，社会の流れに柔軟に適応しながら，効果的な国際交流プログラムの開発と実施，そして，グローバル人材育成への貢献が期待される．

受付2023.10.2／受理2024.1.12

参考文献

リクルート進学センサス（2016）「グローバル化社会における大学進学者の留学意識」 https://souken.shingakunet.com/research/.assets/2016sennsasul.pdf（2023年11月20日参照）

毎日新聞科学環境部（2007）『「理系」という生き方理系白書2』講談社

中橋真穂（2015）「理工系大学院生のグローバル人材育成に向けた短期海外研修（―PAC分析による参加者の意識変容に着目して―）」『グローバル人材育成教育研究』No. 2（2），pp. 46-57

渡部留美（2009）「短期海外研修のプログラム作りと課題―大阪大学グローニンゲン大学短期訪問プログラム実施報告―」『大阪大学留学生センター研究論集　多文化社会と留学生交流』No.13, pp. 75-82

宮本美能（2012）「超短期プログラムのポテンシャル：A大学におけるオーストラリア語学研修プログラムの一事例考察」『留学生交流・指導研究』No.15, pp. 77-87

岩城奈巳（2012）「留学推進の取り組みが交換留学に与える影響についての実態調査」『名古屋大学留学生センター紀要』No. 10, pp. 23-29

太田浩（2011）「なぜ海外留学離れは起こっているのか」『教育と医学』No. 59（1），pp. 68-76

太田浩（2014）「日本人学生の内向き志向に関する一考察－既存のデータによる国際志向性再考－」『留学交流』No. 40, pp. 1-14

藤田智博（2015）「若者層の内向き志向－留学をめぐる「グローバリゼーションの逆説」」『ソシオロジ』No. 60（1），pp. 63-79

小島奈々恵・内野悌司・磯部典子・高田純・二本松美里・岡本百合・三宅典恵・神人蘭・矢式寿子・吉原 正治（2014）「日本人大学生の海外留学に関する意識調査：「内向き志向」と留学意思の関係」『総合保健科学』No.30, pp. 21-26

小林元気（2017）「若年層の「内向き」イメージの社会的構成プロセスと海外留学の変容」『留学生教育』No. 22, pp. 59-68

伊藤雅一・胡安琪（2023）「コロナ禍における大学生の内向き志向の実態 －異文化間感受性と対面およびオンラインの関係流動性の調査より－」『茨城大学全学教育機構論集 大学教育研究』No. 6, pp. 47-57

内藤哲雄（1993）「個人別態度構造の分析について」『人文科学論集』No. 27, pp. 43-69

内藤哲雄（2002）『PAC分析実施法入門（改訂版）「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版

末田清子（2001）「留学体験の意味づけー大学生の留学前及び帰国後の滞在国に対するイメージ分析を通してー」*Journal of Intercultural Communication.*（4），pp. 55-74

中川典子（2013）「日本人留学生の異文化接触とアデンティティ留学前、留学中、帰国後のイメージ分析を通して」『流通科学大学論集．人間・社会・自然編』No. 25（2），pp. 53-75

土田義郎（2003）「PAC分析支援ツール」 http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm（2023年11月10日参照）

文部科学省（2011）「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」『グローバル人材育成推進会議』No.3, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/__icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf（2023年9月10日参照）